

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## 小さな中国のお針子

2002年・フランス映画・110分  
配給/アルバトロス・フィルム

2004 (平成16) 年4月14日鑑賞  
〈東宝東和試写室〉

Data

監督・脚本・原作：戴思杰（ダイ・シージェ）

出演：周迅（ジョウ・シュン）／劉燁（リュウ・イエ）／陳坤（チユン・コン）／叢志軍（ツォン・チーチュン）／王宏偉（ワン・ホンウェイ）

### 👁️👁️ みどころ

文化大革命の嵐が吹き荒れる中、険しい山の村へ「下放」された2人の青年は、美しいお針子と出会う。禁じられた西洋の文学書を読み聞かせる中で、惹かれ合う男女たち。音楽や文学、そして知識への興味と欲求は、人間の根源的なもの。いくら「文化大革命」でも止めることはできない！フランスに住む中国人監督が、自らの原作を映画化した美しい作品。中国映画の素朴さとフランス映画のユーモアとおしゃれな味がミックスした秀作。モーツァルトのバイオリンソナタの響きと鳳凰山の景色が実に美しい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### 〈中国の文化大革命—激動の10年〉

1966年から1977年の毛沢東の死亡まで、約10年間続いた文化大革命は、中国人も含めて今の若者にはもはや過去のモノになっているようだが、当然ながら中国映画ではよく描かれている。私が最近観た中国映画、「活きる」や「さらば、わが愛／霸王別姫」は、青春時代に文化大革命を体験した中国のニューウェーブといわれる第5世代の監督張藝謀（チャン・イーモウ）や陳凱歌（チェン・カイコー）らがつくった作品だが、ここでも実に生々しく、文化大革命の「バカバカしさ（?）」が描かれていた。

古い習慣や思想を一掃して、革命思想、社会主義思想を徹底させようとした文化大革命の目標は次第に毛沢東を神格化する紅衛兵運動と結びつき、苛酷かつ不合理なものになっていった。そこでは魯迅などの「反革命的」な書物だけではなく、科学的な知識や外国の文学、音楽についてまで、中国共産党や毛沢東を讃える書物以外はすべて「反革命的」、「反動的」というレッテルをはられることになってしまったのだ。いわばかつての秦の時代の「焚書坑儒」の「現代版」だ。したがって、それまでに存在していた中国の医師、作家、

文化人などの知識階級は、そのほとんどが若い紅衛兵たちに「反革命的」とみなされ、「三角帽子」をかぶせられ、プラカードをつり下げられて、「自己批判」を強いられた。そして、その知識階級の子弟たちも、反動的な「知識青年」と見なされ、「再教育」のために都会から片田舎へ送られ、厳しい労働に従事させられた。これが1971年から実施された「下放」政策である。その目的は、都会のブルジョワ的生活を捨て、貧しい田舎の土の中で生産に従事させることによって、労働の喜びを理解させ、労働者・農民の連携の必要性を身体で覚えさせることにあり、まさに革命思想を再教育することにあった。

## ＜「下放」の主人公2人＞

文化大革命真っただ中の1971年に「下放」された17才のマー（リュウ・イエ）と18才のルオ（チュン・コン）は、2人とも医師の息子。2人は四川省の鳳凰山という山中の村に「下放」された。1番近い町まで、石段を歩いて丸2日かかる辺境の村だが、実に美しい山だ。

私が2001年の夏に西安、敦煌旅行をした時、丸1日かけて登り降りした華山の風景がよみがえる。とにかく美しい山々だ。しかし自分1人で歩くだけならまだ楽だが、山上へ物を運ぶのは大変。すべての荷物をリュックのように肩にかついで運ぶしかない。水も食料も荷物も、そして人間も・・・とにかく大変な肉體労働だ。



【小さな中国のお針子】  
ビデオ/DVD販売元：アルバトロス <http://www.albatros.com>

## <村に響きわたるモーツアルトのソナタ>

「下放」された2人は、早速村長によるチェック。当然村長は、毛沢東思想に忠実だが、村長をはじめ村人らは字を読めない人ばかり。荷物チェックの作業中、外国の料理本さえ「反革命的」と言われて燃やされてしまうありさま。さらに、マーご持参のバイオリンもただの玩具と思われて同じ運命に……。それを救ったのはルオ。「弾いてみる」、という村長の命令により、マーはモーツアルトのソナタを「毛主席を想って」という題だとして弾いた。

今の日本人なら誰もが知っているモーツアルトの有名な美しい旋律が鳳凰山の山中に流れたのだ。何ともおしゃれな中国映画……。と思っていたら、後に述べるとおり、これはフランスに住む中国人の映画監督ダイ・シージェが書いたベストセラー小説を自ら映画化したものだから、まさにフランス映画だった。

## <小さなお針子との出会い>

「小さなお針子」を演ずるのは、「始皇帝暗殺」（1998年）で盲目の少女役として登場した女優ジョウ・シュン。TVシリーズ「像霧像雨又像風」で、一躍中国の超人気スターとなった女優とのこと。彼女は、この村では結構威張っている「仕立て屋」のジイさんの孫娘。「仕立て屋」が威張れるのは、村の娘たちの服を作るミシンを扱えるからだ。このジイさんは若者が担ぐ籠に乗せられて山中を移動する、いわばお殿様だ。

ある情報を元に、山中にある温泉で、お針子を含む村の娘たちが裸同然の姿で温泉を楽しんでいるのを、2人の青年は目を輝かせながら盗み見していた。そこで突然ルオは足を滑らせた……。そしてそこから運命的な出会いが……。少々間が抜けているが、これまた何ともおしゃれな青春模様。オレもこういう時代に戻りたい……。

## <世界共通の青春文学—スタンダール、ドストエフスキー、ロマン・ロラン、そしてバルザック……>

「字は読める?」。お針子とマー、ルオの3人は、そんな会話から毎晩本を読んでやることになった。この本は、父親は批判を受けた作家、母親は詩人であったため、反動的な知識青年とみなされて、同じく鳳凰山へ「下放」されていた「メガネ」とあだ名される青年から盗んで手に入れたもの。「メガネ」は、田作りと田植えを学び、今では頑固な牛も従うようになったと「再教育」の成果を強調し、都会に帰れることになったが、実は、大量の外国の文学本を隠し持っていたのだ。

## <一冊の文学書が人間を変える……>

バルザックをほとんど徹夜で読んだマー。翌朝マーは、「世界は完全に変わった。すべて変わった……」、「コルシュール・ミルエ!」と主人公の名を叫ぶ。

ある時、マーとルオの2人は、朝鮮映画「花売り娘」を観て、集まった村人たちにその物語を語り聞かせるよう、村長から命じられた。さすが知識人の2人。表現力は豊かだ。村の女たちは涙ぐみながら、2人の物語りに聞きいった。

マーとルオはお針子を同じ映画に連れて行ったが、お針子は映画よりも「2人の話の方が素敵！」と語る。「また同じ映画だと村長が知ったら、次から来れないぞ！」。そこで、2人が村人に語った映画のストーリーは・・・？何とバルザックだ。舞台はアルバニア。村長は、「アルバニアは中国の良き友人だ」と呼ぶ。そして、ルオは、この映画の主人公は「コルシユール・ミルエ」、監督の名は「バルザック」。そして村人たちも一斉に呼ぶ。「コルシユール・ミルエ！」、そして「バルザック！」・・・。何とも滑稽な風景だが、自分の知らない世界を見たいという人間の素朴な気持ちを何ともコミカルに表現しているいいシーンだ。

2人から本を読み聞かされて「文学かぶれ」してきたお針子を心配した「仕立て屋」のジイさん。しかし、何とこのジイさんも2人から話を聞くようになっていった。ジイさんに9晩かけて語った物語は「モンテクリスト伯」。フランスの港町マルセイユから始まる、フランスの船乗りのお話だ。この物語を聞いたことによって、「仕立て屋」のジイさんが作る村の女たちのファッションが、急に田舎臭いものからヨーロッパ風に変わっていった。いかり模様のついたセーラー服が登場。そして、お針子の服はユリの花模様の赤いブラウスだ。

文化大革命！クソくらえだ・・・。

### <原作、監督の原体験>

この映画は原作、脚本、監督である戴思杰（ダイ・シージェ）の原体験を綴った作品。中国に生まれ、自ら10代後半に「下放」された経験を持ち、20才頃からフランスに留学し、そのままフランスに残ったという人物だ。

「仕立て屋」のジイさんに9晩かけて「モンテクリスト伯」を物語るエピソードは実際にあつた話らしい。従っていかにもフランス風のしゃれたユーモアが散りばめられているうえ、ホンモノの青春群像がみずみずしく描かれている。

日本でいえば、いわば川端康成の「伊豆の踊り子」といったところか・・・？

知識青年と純真無垢な旅の踊り子、状況設定はもちろん違うものの、20才前後の若者のもつ感性や異性への想いは世界共通だし、知識階級の男性がもつ知識や文学が、貧しく無知で無垢な女の子とどんな形で結びついていくのか、そのプロセスには世界共通のものがある。

### <ピバ！中国青春映画！>

この映画のストーリーは実によくできている。15年後、マーはバイオリン奏者として

フランスで活躍、パリで友人と四重奏団を組んでいる。一方、ルオは今や歯科医学の権威。結婚して上海に住み、息子も1人。そして、鳳凰山の山は、近々、揚子江に建設される巨大なダムのために水底に沈む運命だ。

こんな鳳凰山をマーは訪れた。かつてのお針子を捜すために・・・。

広いリビングルームで、ワインを傾け、このお針子を捜す旅をおさめたビデオを見ながら、お針子のことを語り合うマーとルオの目は本当に輝いていた。まさに、「ビバ！お針子！」、「ビバ！青春！」。

### **<美しいラストシーン>**

そして美しいラストシーン。ダムは建設され、今や水の中に沈んでしまった。かつての思い出の住まいや本を隠した洞窟。そしてかつて命がけでお針子が中絶手術を受けた小屋。それらすべてが今や水の中に沈んでしまった。しかし、その水の中。あの「タイタニック」の水中シーンを思い出させるような画面が展開され、家の中でマーとルオは本を開き、お針子にバルザックを語っていた・・・。

2003（平成15）年3月25日記